

# 農業土木を 支えてきた人々

## “讃岐の禹王”西嶋八兵衛

—溜池の修築，河川の改修—

黒 下 年 保\*

### I. はじめに

いま、NHKで「シルクロード」に引続き、ドキュメンタリーシリーズ「大黄河」が放送されている。世界四大文明の一つ「黄河文明」を生み出した黄河は、その形状から「竜」にたとえられ、しばしば氾濫しては多くの人命と財産を奪ったことから「暴れ竜」とも呼ばれ、古代中国では「黄河を治める者は、天下を制す……。」といわれてきた。この黄河の一大治水事業を成し遂げたのが禹であり、禹はこの功績により、舜王から天下を譲り受けて夏王朝の始祖、禹王となった。これは約4000年前の古代中国の出来事であるが、中国最古の史書である「書経」の記述の中に大聖禹王の謨（はかりごと）としてその業績がたたえられている。

ところで、この偉大な業績を三文字で表し刻まれた「大禹謨」なる石碑が、天下の名園といわれる「栗林公園」の一隅に据えられている。この石碑が発見されたのは全く偶然のことで、大正2年の春、県内では土器川に次いで大きい香東川の中流部で、その前年に決壊した堤防の復旧工事中に、土砂の中から掘出されたものである。発見当時はその意味や由来など知るものもなく、長い間放置されていたが、戦後、郷土史家平田三郎氏や元栗林公園事務所長藤田勝重氏らの調査によって、大禹謨の字句の意味、これを堤防上に建てたいきさつや、大禹謨の字が本稿の主人公である西嶋八兵衛の筆によるものであることが明らかにされた。発見されてからおおよそ50年の歳月を経た昭和37年7月、西嶋八兵衛とゆかりの深い栗林公園内に安置され、彼の治水・利水における輝かしい業績がたたえられることと相なった次第である。

### II. 讃岐の「禹王」

讃岐の国と古代中国、讃岐の一河川と大黄河とを同一



写真-1 栗林公園内の「大禹謨」の石碑

視するわけではないが、讃岐の地で大きな足跡を残した西嶋八兵衛は、治水面ではまさしく「讃岐の禹王」であり、利水面では「讃岐の溜池の父」でもある。

西嶋八兵衛は慶長元年（1596年）、遠江国（静岡県）浜松で生まれ、はじめ名を之尤（ゆきまさ）といったが、40才のときに之友（ゆきとも）と改めた。ここでいう八兵衛は通称である。17才の時、伊勢国津領主、藤堂高虎に気に入られ、近習役として150石で召し抱えられた。その後、徳川家康の大坂城攻めが起り、高虎に従って出陣した青年武者、八兵衛は数々の武勲をあげ、高虎の期待に見事に応えた。

その八兵衛が技術者として頭角を現し始めたのは24才ごろからである。大坂城の修築工事に際して、普請総奉行となった高虎の命を受け、工事見積を行い、京都二条城の工事設計もまた八兵衛が担当し、土木工事に造詣深い技術者として、他藩にも知れ渡るところとなった。

西嶋八兵衛と讃岐の因縁は、藤堂家と讃岐領主、生駒家との姻戚関係によるもので、高虎にとって娘婿にあつた

\* 香川県農林部土地改良課（くろした としやす）

生駒藩三代目の当主正俊が元和7年(1621年)に病死し、11才の高俊が世を継いだことから、外祖父の高虎が後見人となり、高俊世襲の後片付け役として、自分の信頼する家臣である八兵衛を讃岐へ出向させたことが、その発端である。技術者・西嶋八兵衛に、行政面での事務才能と政治手腕が問われた一時期であった。26才の八兵衛は領主交代の大役を無事果たし、一旦伊勢へ帰藩したが、彼の優れた才能を見込んだ生駒藩は、今度は高虎に請い、彼を客臣として迎えることとなった。かくして八兵衛は寛永2年(1625年)から寛永16年までの15年間、30才から44才までの働きざかりを、生駒家のため、讃岐の領民のため数多くの治水・利水事業と取組み、営々として献身的な努力を積重ねることとなったわけである。

生駒藩で八兵衛は普請奉行・郡奉行などの役を命じられ、はじめ500石であった禄高が寛永6年には1,500石、同7年には2,000石と次第に加増されるなど、破格の待遇を与えられたが、これによっても彼が生駒藩において、いかに重用されていたかがうかがえる。

しかし、当時、八兵衛を迎えた讃岐路は寛永初年に相次いだ災害のため、まことに悲惨な状況で、当代随一といわれた土木技術家にとっても決して安易な情勢ではなかった。古い記録によると、八兵衛が到着した寛永2年の11月には大地震があり、翌3年間4月7日には大暴風雨、そのあとは干天続きで7月13日まで3カ月も降雨がなく、大干ばつのため餓死するものが多く、さらにあくる年の寛永4年9月4日に再び大地震が起こり、続いて9月12日には風水害に見舞われて収穫皆無という、さんざんな状態であった。

表-1 西嶋八兵衛の讃岐における業績一覧

西暦(年)	年号(寛永年)	主な出来事および業績
1625	2	幹田村(観音寺市)の湿地改良
1626	3	[4月から95日間降雨なし、民多く餓死(讃州府誌)]
1627	4	龍満池(香川町)、小田池(高松市)、堀江大池(坂出市)の築造
1628	5	山大寺池(三木町)、瀬丸池(高瀬町)の築造、三郎池(高松市)の増築
1629	6	仁池(観音寺市)の増築、青葉池(大野原町)の築造
1630	7	岩瀬池(高瀬町)、岩鍋池(観音寺市)の増築
1631	8	満濃池(満濃町)の復旧成る
1632	9	[讃岐でも干ばつ(蜂須賀家記)]
1633	10	亀越池(満濃町)の築造
1635	12	神内池(高松市)の築造
1637	14	香東川の付替え、福岡、木太、春日(高松市)の新田開発、[島原の乱始まる]
1638	15	一の谷池(観音寺市)の築造、[領国の川、大干、大ききん(讃州府誌)]

表-2 西嶋八兵衛の築造・増築に係る溜池一覧

溜池名	市町名	堤高(m)	堤長(m)	貯水量(千m <sup>3</sup> )	満水面積(ha)	池敷面積(ha)	灌漑面積(ha)
神内池	高松市	15.2	249.0	1,160.0	35.4	38.0	210.0
三郎池	〃	14.6	265.0	1,768.0	41.5	43.9	450.0
小田池	〃	9.2	1,760.0	1,427.6	34.6	37.5	400.0
山大寺池	三木町	8.3	330.0	369.0	13.9	19.9	250.0
龍満池	香川町	7.6	520.0	528.4	15.9	17.1	160.0
亀越池	満濃町	17.0	96.0	958.5	19.0	19.5	543.0
満濃池	〃	32.0	155.8	15,400.0	138.5	142.1	3,239.0
一の谷池	観音寺市	12.0	340.0	661.0	29.0	31.8	318.5
仁池	〃	7.0	402.0	344.4	11.0	11.4	91.0
岩鍋池	〃	14.1	260.0	366.0	6.7	7.1	128.0
岩瀬池	高瀬町	17.6	152.0	1,016.0	23.5	24.2	249.0
瀬丸池	〃	15.0	185.0	300.0	4.0	5.1	40.3

注) 溜池の規模等は昭和60年現在のもの、香川県農林部:「香川県ため池実態調査」による。

大雨が降れば鉄砲水が田畑や民家を襲い、逆に日照りが続くと讃岐砂漠が出現するという古来からの讃岐の風土。自然災害の猛威の前になすすべもなく、茫然自失の有様。西嶋八兵衛はそうした状況の中、疲弊しきった讃岐の地にさっそうと登場し、その本領を遺憾なく發揮していったのである。

生駒藩の普請奉行、郡奉行を命じられた八兵衛はさっそく領内をくまなく歩き、その惨状を実地に見て回った。八兵衛が並の役人ではなく、土木技術家としての目で現地をつぶさに見て回ったことが、その直後から始まった溜池の築造や新田開発などに見事に生かされたのである。八兵衛は讃岐の惨状を藤堂高虎に報告、後見人としての立場で高虎から生駒家当主の高俊に助言してもらい一方で、生駒藩の重臣に対し恒久的な治水利水事業計画の実施を進言、着任早々の寛永2年から事業に着手し、数々の業績をあげていったが、その主なものは表-1に示すとおりである。

以上の業績から見ても、彼がいかに讃岐の窮状を救うため、東奔西走したかがうかがわれる。その築いた溜池は、満濃池の復旧をはじめ、瀬丸池、岩瀬池、一の谷池、亀越池、小田池、龍満池、三郎池、神内池、山大寺池など、今日、香川県下で著名な溜池のほとんどを手がけ、その数はわずかに数年にして合計90余りの多きにのぼったと記録されている。

### III. 満濃池の復旧

これらの溜池事業のなかで最大の工事は満濃池の復旧である。当時の満濃池は元暦元年(1184年)の大洪水に

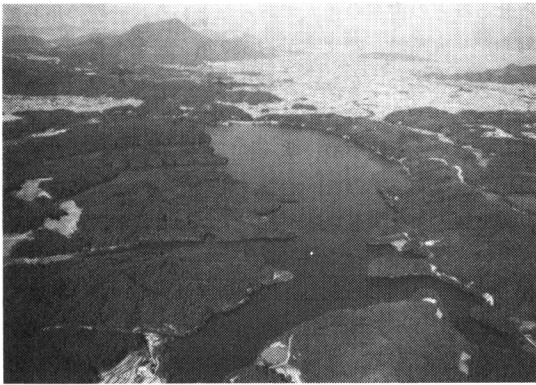


写真-2 現在の満濃池（仲多度郡満濃町）

よる破堤以来、450年の長きにわたって放置されたまま全く修築されず、池の水も枯れたまま、池の底には池内村という20戸ほどの村落ができるという有様で、池掛りの水田は灌漑用水が全然得られず、農民の窮乏もその極に達していた。

なお、満濃池は、灌漑用溜池としては今も日本一といわれ、その創築は大宝年間（701～704年）讃岐の国守道守朝臣によるものといわれる。満濃池が名実ともに日本一となるまでには、かなりの修復、増築の歴史があるが、忘れてはならない大規模な修復が三度ある。その最初が弘仁12年（821年）の弘法大師によるものであり、二度目が寛永8年（1631年）の西嶋八兵衛によるもの、三度目が明治3年（1870年）の長谷川佐太郎によるものである。

全く変わりはた満濃池をまのあたりにした西嶋八兵衛はその荒廃ぶりに涙すると共に、わが国最古の由緒ある名池の復興について、技術者として大いに意欲を燃やし、彼が最も力を注いだ事業の一つともいわれている。

表-3 満濃池の規模比較表

項目	復旧当時	現在 (m)	備考
堤長	45間 (82.0m)	155.8	
堤築留	6間 (10.9m)	20.0	堤体天幅
堤根置	65間 (118.0m)	200	〃 敷幅
堤後法	23間半 (42.8m)	75	堤体後法長
堤前法	35間 (63.7m)	120	〃 前法長
深さ	11間 (20.0m)	29	水深
池長(南北)	900間 (1,630.0m)	2,400	
〃 (東西)	450間 (815.0m)	1,200	
池廻り	4,500間 (8,200.0m)	14,000	

注) ○復旧当時の規模は「満濃池古図」による。  
○現在の規模は昭和に入って6mのかさ上げを行っているのでその規模および貯水量とも倍増している。

八兵衛は復旧工事に着手するにあたり、事前に十分な現地調査を行い、周到な計画を立て、信頼する福家七郎兵衛、下津平佐衛門の両名を普請奉行として、工事の指図にあたらせている。寛永5年（1628年）10月に着工以来、辛苦に耐え、努力を傾注して工事を進めた結果、ついに寛永8年（1631年）2月に至って完成を見た。この大工事の竣功によって恩恵に浴した村落は那珂、鶺尾、多度の合せて3郡44カ村の広範にわたり、その収穫高は3万5千石余りで、当時の讃岐総石高のおよそ6分の1にも達する大きなものであった。

#### IV. 香東川の付替え

こうして、八兵衛は「讃岐日照り」の対策を着々と進めて行ったが、これと並行して讃岐特有の天井川改修にも意を注いだ。なかでも注目されるのは香東川の川筋付替え工事であり、讃岐の禹王の話もこれに由来する。香東川は阿讃の国境に源を発して北流し、瀬戸内海に注いでいる。香川県では土器川（県下、唯一の一級河川）に次いで大きく、全長 33 km の河川である。香東川はいままでこそ一本になって海に注いでいるが、昔は川筋が二つに分かれ、一つの流れは現在の高松市内を貫流していた。すなわち、寛永のころまでは 図-1 のように大野郷（香川町）で二股に分かれ、東の流れは石清尾山系の山すそを伝い、栗林公園付近から番町筋を経て西浜に注

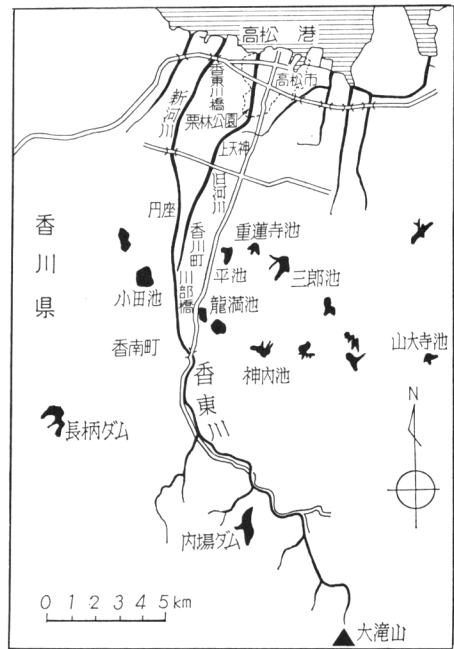


図-1 香東川水系略図

ぎ、一方、西の流れは弦打山の西、現在の川筋を伝って海へ流れ込んでいた。ところが、永い年月の間に、上流から運ばれてくる土砂は段々に堆積し、ことに東の流れは今の高松市内付近で河床が浅くなり、雨の降るたびに急速に水かさの増した濁流が、一気に人家へ浸水して高松城下の住民を悩ましていた。そのうえ、満潮時には海水が逆流し川筋からあふれることもしばしばで、高松の住民にとって香東川は恐ろしい流れであり、禍いの水であった。生駒親正が高松城築城のときにも、このあくなき水禍には随分手を焼き、城下町の安泰を図るため川筋をいくつか作って水禍を除こうとした記録が残っている。

一日も早く洪水をなくし、安心して生活ができるようにしたいとの住民の切実な願いに応えたのは本稿の主人公である西嶋八兵衛その人であった。八兵衛は東の流れを大野郷あたりでせきとめ、本流を西側の川筋一本に絞るといって一大治水事業を計画した。付替え工事に関する詳しい記録は残っていないが、寛永8、9年ごろその工事が始まり、寛永14年(1637年)ごろ完成したものとされる。この付替え工事により地域住民は水禍から救われたうえに、10 km にわたる河床が美田となり、今日の高松市繁栄の礎も築かれたのである。当時の作業状況は分らないが、八兵衛が多くの開発事業と取組んだ時代背景を考えると、彼の偉大さには全く頭の下がる思いがする。藩政は振るわず、藩財政は窮乏していた。したがって、工事費も思うように支出できなかったにちがいない。そのため彼は私費までも投じている。しかも住民は打ち続く干ばつや洪水にさいなまれ、毎日の生活にさえ追われていた。このように開発事業を行うには最も不適当な時代であったにもかかわらず、八兵衛はみじんも屈することなく、未来を築く百年の大計を思い、大聖禹王の理想であり、謨(はかりごと)であるこれら事業の実現のため、不とう不屈の精神であらゆる悪条件を克服して、やり遂げたのである。

最初にふれた「大禹謨」の碑は、この事業が完成した寛永14年ごろ、香東川流域の安泰を祈り、八兵衛が自ら書いて、大野郷中津の川岸に建てたものと思われる。

ところで、八兵衛の生涯を通じて見た場合、技術者としての業績があまりにも大きかったせいか、八兵衛のもう一つの顔のことはあまり伝えられていない。もう一つの顔というのは書道家としての西嶋拙翁のことである。

鎌倉末期、伏見天皇の皇子、尊円親王を祖とする書道尊円流の流れをくむ八兵衛の書は「御家流」で、その流麗な筆跡は名だたる鑑定家をして尊円親王の真筆と見誤

らせるほどの書道の達人であったという。一塊の川石に刻した「大禹謨」の文字が約350年を経た今日でも、非常な気品と味わいをもってわれわれに迫るものがあるのも当然のことといえる。

ともかく、讃岐の国は藩政初期において西嶋八兵衛という立派な先達を得て、治水、利水はもとより新田開発の面でも大きな躍進を遂げた。すなわち、溜池の築造や河川の改修と相まって湿田改良や新田開発もまた急速な進展を示したのである。これを数字で見ると、生駒家初代藩主親正から二代一正に代った慶長6年に17万3,000石であった石高と、寛永17年に改めた領内総石高23万2,948石と比較して、40年の間に約6万石という著しい増加を示している。このことは西嶋八兵衛の讃岐における利水事業の成果を物語る、輝かしい足跡を示す以外の何ものでもない。

## むすび

西嶋八兵衛が15年間にわたり滞在した讃岐に訣別を告げたのは生駒藩のお家騒動が原因である。生駒家は四代54年にわたって讃岐一国を領したが、寛永17年、四代高俊のとき新旧重臣の権力争いから燃えあがった、いわゆるお家騒動を理由に、高俊は出羽国矢島一万石へ改易となり、事実上、断絶した。八兵衛は藩内の紛糾が救いようのない事態となっていることに気付き、主家の藤堂家といち早く連絡をとり、この騒動に先立つこと一年の寛永16年、伊勢に帰り、累を免れている。

伊勢に帰った八兵衛は藤堂高虎のもとで再び治水利水事業で活躍している。後に八兵衛は伊賀上野に隠居し、拙翁と号して書道に親しんでいたが、延宝8年(1680年)病に倒れ、3月20日55才の生涯を閉じたといわれる。

今年もまた、満濃池のゆる抜きとともに讃岐路はいっせいに田植えが始まろうとしている。満々と湛えられたこれらの溜池を見るにつけ、溜池と共に生きた西嶋八兵衛はか多くの先人たちが偲ばれ、この貴重な遺産について多くを学びとると共に、後世ながく守り継いで行くべきわれわれの責務の重さをひしひしと感じている。

最後に、ご指導、ご協力をいただいた佐戸政直氏(前、香川県技監)、兼間和行氏(香川県土地改良課)のお二方に深く謝意を表す。

## 参考文献

- 1) 渡辺茂雄：四国開発の先覚者とその偉業
- 2) 藤田勝重：西嶋八兵衛と栗林公園
- 3) 四国新聞社：讃岐人物風景(4)
- 4) 四国新聞社編集局・香川清美・長町博・佐戸政直：讃岐のため池
- 5) 桂 重喜：香川用水 No.28 水利の開発に尽した人々(1)

[1986. 5. 28. 受稿]